

チーフテスターの アルバム 21

笹目二郎

今回はアメリカ車の話です。CGでアメリカ車を取り上げた機会は少なく、単発で新型車の紹介やインプレッションを載せる程度で、大々的に特集を組んだような記憶はありません。80年代から90年代はアメリカ車の品質が悪く、排ガス対策による受難の時代?でもあり、製造者の怠惰な働き振りが製品にも表れていました。ドアの中から異音がするので内装パネルを剥がしてみると、ビールの空き缶がでてきた……というのは聞いた話ですが、自分自身で実際に体験した話としてもこんなことがありました。

箱根の山の上で突然ブレーキが壊れ、ブシューッとペダルがフロアに達し油圧が上がリません。エンジブレーキとサイドブレーキで何とか停めて降りてみると、ブレーキオイルが漏っていてディスクもタイヤもオイルで濡れていました。2系統式マスターシリンダーのため、まったく効かないわけではなく、ダマシながら低速で山を降りて、旧知のガソリンスタンド、サガミ屋さんに預け、ディーラーに引き取りに来てもらいました。後日判明した原因は、ピストン加工時の金属の切れ端が混入していて作動の度にシールにキズを入れていた……というわけです。大事に至らなかったから良かったものの、状況とタイミング、乗り手によっては命にかかわる事件でした。

年間300台以上の車をテストしてきた経験者としては、こうしたたった一件であっても、車を100%信用してはイケナイという教訓を得ました。だから2度踏みリリース方式のサイドブレーキを僕は毎回非難するわけです。Web関連の読者の中には、こうした評価に異を唱える人もいるようですが、想像力の欠如としか思えません。反復使用できない構造ではイザという時の不安は拭えないのです。この手のものの中では、Dレンジやリバースをセレクトすれば連動してリリースされるキャディラック方式が最良、とと思っていましたが、最新モデルでは止めてしまったんですね。それだけアメリカ車の品質も向上して信頼性も高まった……なんてこととは無関係です。やはり主ブレーキが何らかの理由で失陥した場合の緊急時には、サイドブレーキは最終的な抛り所なんですから、普段の軽微な利便性だけを優先した考え方には反対です。法廷論争に至る事故例こそ幸い聞いたことはありませんが、可能性の段階でくい止めるべきだと思います。

アメリカ車といえば長大なステーションワゴンが今もって魅力的ですが、ミニバンやSUVの形態に押され気味なのが現状です。今更りバイバルで再び量産されることはないでしょうから、今残っている車だけでも未長く保存されて、時々でも目を楽しませてくれることを切望します。そう言えば、横に3人掛けできるベンチシートなんかも少なくなっていましたね。凝ったスペックでパワーを稼ぐのではなく、必要ならば排気量で稼ぐアメリカ流のエンジンもおおらかさにひと役買っており、シンプルな構造も修理には有利でした。資源の無駄遣いを避ける考え方からも、1台の車と長く付き合う風潮になりつつある今、ボディは古いものを再利用してデザインを楽しみ、中身を最新スペックにして性能や効率を確保する復活型のレストア車なんか面白そうですね。

笹目二郎

自動車メーカーでテストドライバーとして車両開発に携わった後、カーグラフィック編集部に加わる。チーフテスターとして数々のスーパースポーツのフルテストを担当。現在はフリーランスのモータージャーナリストとして活躍中である。



photo : CG library